小学校英語の今後に提言

LLシホヤ新井教室・遠藤代表

遠藤由明さん（61）。LLシホヤ新井教室代表。東京経済大卒業後、外資系会社勤務を経て父親の跡を継ぎ志保屋書店へ。昭和49年ごろ、当時珍しいLL英語教室を開講。以来37年にわたり英語教育に携わる。平成20―22年まで新井小の英語活動導入助言者（アドバイザー）を務める

小学校に「外国語活動」（英語）が本格導入されてから、半年以上が過ぎた。それまでの二年間、本紙で小学校英語教育への提言をしてきた妙高市のLLシホヤ新井教室代表、遠藤由明さんから、今後期待する小学校英語教育のあり方について、総括的に述べてもらった。

柔軟にカリキュラム進化

期待の核心3つ

「児童英語」という特別な学習はない

まず、「児童英語」というベニアの高校生たちのように、二、三カ国語を操れる日本人がいまだに少数派である現実を、英語段階、習熟度段階に適した指導に携わってきている指導者は恥ずかしいと反省しなければなりません。

単純な道理の納得で済む

英語運用能力を高める目的で、文部科学省が、大学教授が、ちまたの学習塾が威勢を持って唱えるような指導理論や提言などは、ごく単純な道理から目覚めてほしいのです。

ミッキー安川さんに学ぶ

三つの核心は単純な道理です。戦後から東京オリンピック当時活躍されていたタレントのミッキー安川さんは、日英のバイリンガルでした。プロレス中継で外国人レスラーへ罵倒（ばとう）、激励、インタビューする様子を中学三年生だった私は「どうしたら彼のように英語が使えるようになるのかな」とあこがれの目でTV観戦していました。彼の著書「風来坊留学記」にその答えがありました。

ミッキーさんは十代で自立心がついたとたん、貨物船でアメリカへ渡りました。「日本を飛び出して自由の国、アメリカで一旗揚げてやる」とそれだけの動機でした。石炭運びなど最低の労働の中でたどり着いたところがシンシナティでした。「シンシナティ大学で日本人の素晴らしさを教えたい」と入学志願しましたが、「何かを伝えたいという熱意は分かります。しかしあなたの英語はほとんど分かりません。まず一年間、幼稚園で英語を学びなさい。仕事も探してあげます」と、日本語を話すことのできた女性職員に諭されました。

"やる気"を忘れずに子どもはよく見ている

理念、カリキュラム、指導案、そして指導者の四つを磨いたとしても、さらに忘れてはならないのは「伝えたい」「聞きたい」という好奇心、気概、熱意、根気からなる"やる気"です。便利、早い、安いにひたってしまった現代の日本人において、難しい点はここにあるのです。

器を作り、そこで花咲いてほしい中身とは、子ども、大人を問わず生身の人だからです。私は英語教育と、どの学校にもある教育目標とは切り離せない宿命だと信じています。

子どもにとっての英語学習とは英語の仕組みだけを教えること以上に、その何倍ものパワーでの「伝えたい！聞きたい！」というやる気を育てることです。子どもたちはよく見ています。「この先生は本気で英語を勉強しているのかな」と。幼稚園で居残りして、テープレコーダーの速さが三歳児レベルから幼稚園レベルに達した時の喜びを熱く書きつづったミッキーさん。ミッキーさんのようなやる気をどうやって育てるのか。この部分に指導者はもっと汗を流すことを期待しています。

「教えることは学ぶこと」。指導者になられるためには、この単純な道理を再確認する必要があると私は思います。

「英語を学ぶことは楽しい！」と先生自身が輝いた時から、子どもたちのための英語学習が始まります。

LL教室の子どもたちの授業の様子。小学低学年で「thinking」と「sinking」の発音を聞き分ける

迎 平成二十四年 元旦 春